

介護実習でのルーブリック評価の導入による効果と課題

福田 洋子 野呂 健一 寶來 敬章 鷲尾 敦
高田短期大学 高等教育研究会

1. はじめに

本稿の目的は、介護実習のルーブリック評価を実習生である学生の自己評価と実習施設による評価を比較検討することを通して、実習生の学びや経験、自己評価の傾向と実習施設の認識、及びルーブリック評価導入の効果と課題を明らかにすることである。このような作業を通して、実習生にとって「何ができることが要求されているのか」という点が明確になるだけでなく、実習施設にとって「何がどこまでできるとどのような評価になるのか」という点を可視化することで、評価基準の明確化や妥当性の向上に資すると考えられる。

これまで、本稿の著者で構成される本学高等教育研究会で実習評価のルーブリック化を進めており、素案の作成、実習施設への試行と聞き取り、ルーブリック評価票の修正等を繰り返して行ってきた。介護実習でのルーブリック評価導入をここ数年の主な研究内容と設定し、三重県内の介護福祉施設と協働しながら進めてきた。まずは積極性や協調性などの汎用的指標に関するルーブリックの導入から始まり、続いて具体的な介護実習で求められる、「利用者との関わり」、「福祉用具の適切な利用」、「介護計画の立案」といった技術的な指標に関するルーブリック化を進め、試用してきたという経緯がある（福田他 2018）。介護施設職員との協働の中で、ルーブリック評価を導入する以前の評価票では、評価項目が不適切・不要なものも含まれているだけでなく、評価の基準や根拠が曖昧なままで実施されてきた。もちろん、実習施設によって厳しい評価であったり、やさしい評価であったりすることは当然起こりうる。しかしながら、ルーブリック評価を用いてその基準や根拠を示したうえで評価の確認、検討をすることは、評価のばらつきを抑制するだけでなく、養成校での実習の事前・事後指導の在り方も大きく改善されることは考えられる。また、本稿で検討する介護実習Ⅲにおいては、本研究会が作成したルーブリック評価票を正式な評価票として採用し、この評価票をもとにして成績評価及び単位認定が行われている。

ルーブリックとは、「ある課題についてできるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」（Stevens, 他 訳書 2016, p. 2）であり、松下（2007）によるとパフォーマンス評価の観点から教育評価が可能なツールであるとされている。文部科学省中央教育審議会（2012）の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて - 生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ -」が出されて以降、パフォーマンス課題をルーブリックで評価することが盛んになってきた。元来、質的評価として位置づけられるパフォーマンス評価は、評価者の主観が介入しやすいと指摘される（松下 2012）。しかしながら、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価は、客観性や公正さ、説明責任を伴

い、学生の意欲も高める評価手法として期待されている。昨今では学修成果の「見える化」という社会的潮流も重なり、高等教育機関での導入が強く主張されてきた。例えば、安藤（2008）は、一般的ルーブリックと単元別ルーブリックの特徴や作成に向けた課題を検討し、一般的ルーブリックという「どの教科のどの単元でも使うことができる」ものと「特定の教科の特定の単元における学びを評価するため」のものがあることが示している。国内においては単元別ルーブリックが主流となっており、一般的ルーブリックの作成や実施は進んでいないことや作成の困難さなどが指摘されている。

また、実習評価において実施されるルーブリックは、医歯薬系の大学においても進んでいる（例えば岡山他 2015、山下他 2016、山口 2013 など）。岡山らは、看護学生の1、2年次の実習での経験を学生自身にルーブリック評価させ、1年次の得点と2年次の得点を比較検討している。2年次の得点が低下する項目があることや、同じ項目であっても学年の上昇に伴う自己評価の難しさなどが指摘され、学生の成長を段階的・継続的に評価できるルーブリックの作成の必要性が主張されている。他に実習をルーブリックで評価することを検討した研究としては、ルーブリックを用いた実習自己評価スタンダードの提案をしている三木（2018）や養護教諭課程の学生のルーブリックによる自己評価を検討している長峰ら（2018）らがある。三木の研究では、効果的に実習を振り返るツールとしての自己評価スタンダードの作成とその必要性を述べている。ともすれば幼稚園や保育所、認定こども園などの違いだけでなく「環境を通じた遊び」が主となる以上、実習生の経験や学びはどの園で実習をするのかに大きく左右される。そのような中で「専門基礎力」や「子ども理解力」、「教育・保育実行力」など、6つの観点を提示しながら論じている。また、介護実習でのルーブリック評価を検討したものとしては柘崎ら

（2018）や宮本ら（2017）がある。宮本らは、「実習記録」に特化したルーブリックの作成について検討している。記録として文字化されたものをルーブリックで評価することの特徴や教員間、教師-学生間の評価の整合性などを実証的に論じながら、学生が苦手意識を抱くことが多い「実習記録」の改善に向けてルーブリックの活用することの意義を述べている。

これらの研究は、実習等でのルーブリック評価票の作成やルーブリック評価の導入・実施を進めているだけでなく、養成校それぞれの文脈や学生の実情に合わせて活用されている。学生と協働しながら作成することや汎用的なルーブリックの作成、ルーブリック評価の実施に伴う今後の指導の在り方の可能性を検討していることなどは本研究においても示唆に富んでいる。ただ、本研究の大きな特徴は本学の実習生を受け入れている実習施設との協働により、ルーブリックの作成を進め、実施・検証をしているという点であると考えられる。ルーブリック評価は、単位認定をする養成校の実習担当教員、実習生、そして実習施設職員の3者が活用するものである。そのような評価である以上、実習施設の視点も踏まえて作成されたルーブリックが、実際にどのように活用され、どのような実習評価になるのか、そしてルーブリックに対してどのような認識を学生や施設職員が抱くのかという点に着目する、いわば「ルーブリックを用いた実習評価を評価する」ことが本研究の大きな意義である。

2. 研究方法

（1）研究調査の概要

本研究会で開発したルーブリック評価票が、実習評価として活用可能であるかをアセスメントするために、本学介護福祉コースの2年生対象(21名：日本人学生10名、留学生11名)の「介護実習Ⅲ(2018年8月31日～9月30日)」で、実際の評価活動に適用し、その結果を次のような流れで検証した。

①開発ルーブリックによる実習評価活動の実施

「介護実習Ⅲ」の実習後、学生による実習の自己評価と、実習先の施設指導者による学生の実習評価に開発したルーブリックを評価活動に用いた。学生の成績評価に実習施設指導者によるルーブリック評価の結果が反映された。

②ルーブリックを用いて評価した実習施設指導者に対するアンケート調査

「介護実習Ⅲ」の実習を実施した9施設の実習指導者15名に対し、以前の評価票とルーブリック評価票とを比べ、評価のしやすさや課題を質問紙調査で確認した(2018年10月1日～12月)。

③ルーブリックを用いて自己評価した学生に対するアンケート調査

「介護実習Ⅲ」を終了し、施設による評価結果を得た学生20名に対し、ルーブリックによる自己評価のしやすさや、施設評価と自己評価の評価結果に対する比較や、評価に対する受け入れ感を質問紙調査で確認した。施設側の評価結果が返却された学生から順に実施した(2018年11月～12月)。

④ある実習施設の実習施設指導者に対するインタビュー調査

質問紙調査後、ある施設の実習指導者から「ルーブリックでの評価は、以前の評価方法より評価が高くなる傾向がある」と伝えられたため、その理由や評価の状況を調査するために、その実習施設の4名の実習指導者に半構造化面接法により聞き取り調査を実施した(2019年1月11日)。

⑤学生の自己評価、実習先の評価結果データの分析

ルーブリック評価が実習評価に使えるか、そしてルーブリック評価結果が指導の改善に使えるかを確認するために、学生の自己評価結果と実習先指導者の評価結果データを分析し、実習学生の自己評価と実習施設指導者との評価の傾向や特徴、違いなどを分析した。

(2) 倫理的配慮

アンケート調査対象者には、研究の意義、目的を説明した上で、回答は無記名で任意であり、調査結果は施設名や個人が特定されないこと、データは本研究以外に使用しないことを口頭、書面にて説明し承諾を得た。また、インタビュー調査対象者には、調査概要を説明し、調査結果は施設名や個人が特定されないこと、データは本研究以外に使用しないことを口頭にて説明し承諾を得た。

3. 実習先へのアンケート

実習施設指導者に対するアンケートには、15名の協力が得られた。年齢別では、40代・50代が多く、各6名合わせて12名であった。実習指導歴は、半数近くの7名が10年以上である一方、3名の方は1～3年であった。

評価のしやすさについては、15名中10人が「大変しやすかった」「ややしやすかった」と回答したのに対し、5名が「大変しにくかった」「ややしにくかった」と回答している。評価のしやすさの理由につ

いて、肯定的意見として、「文章で明記されているので評価はしやすい」「到達状況が具体的にしており、客観的な評価ができる」等の意見があった。一方、否定的意見として、「評価が3段階だけなので、当てはまる項目が見当たらない場合がある」のように、評価を3段階にしたことについてのものがいくつか見られた。

留学生評価の難しさについては、留学生を受け入れた9名中8名が「大変あった」「少しあった」と回答している(図1)。特に、コミュニケーションと記録について日本人と同じ評価はしにくいという意見が多かった。日本語能力の十分でない留学生が産出する発話や文章について、内容が伝わるならよいと考えるか、相手に対して失礼なので訂正するかは、意見の分かれるところであろう。

短大が求める目標レベルを理解できたかについては、15名中10名が「できた」「ややできた」と回答したのに対し、5名が「ややできない」「できない」と回答した(図2)。年齢別、実習指導歴別で見ると、50歳代の6名中5名、実習指導歴10年以上の7名中5名が肯定的回答をしている。肯定的回答をした方からは、結果ではなくプロセスの評価である点が、施設側の提供している指導方針とほぼ合致していたという意見や、3段階の中間段階が短大の求めるレベルだと理解したという意見があった。一方、短大が最低限どのレベルに持っていきたいかが伝わらないという意見や短期間での目標としては高いと感じるところがあるという意見もあった。

ルーブリック評価票の5領域について、記述のわかりにくい表現など改善すべき点がないか自由記述で回答を求めた。施設理解についての意見が多く、「短い実習期間でチームリーダーの役割の理解は難しい」との意見や、「どこまで理解してもらっているのかを確認する機会がない」との意見があった。そのほか、実習態度の「改善に努めている」「適切な情報を得ている」という記述について、指導者が判断するのが難しい時があるという意見や、介護活動について、「実習生に個別性に応じたケアというのは、どこまで求めているのかが、わかりにくい」という意見

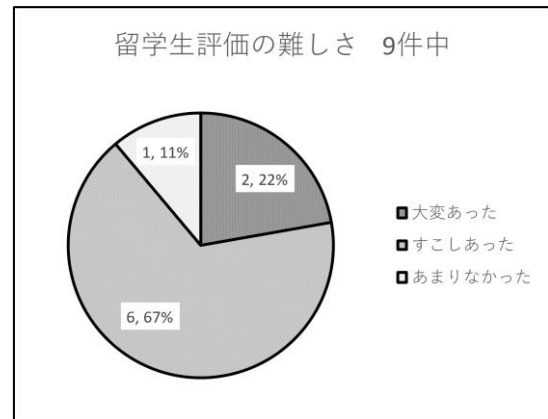


図1 指導者調査 留学生評価の厳しさ

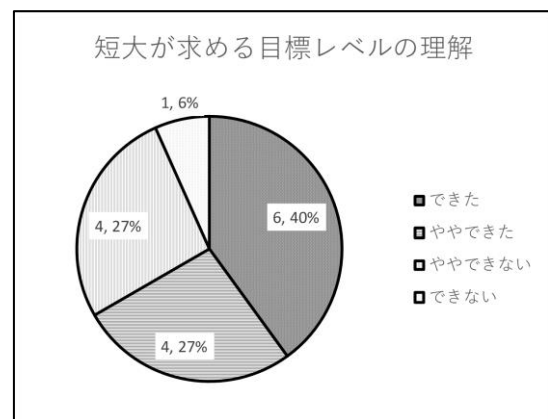


図2 指導者調査 短大が求める目標レベルの理解

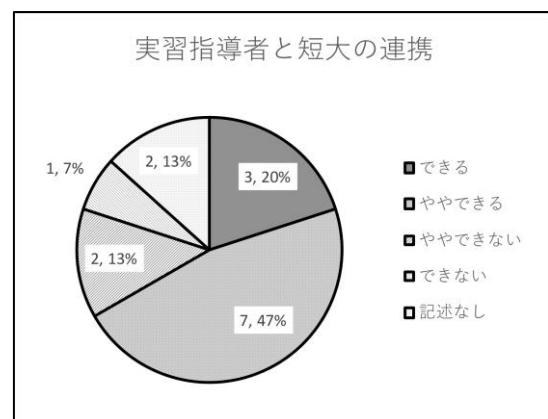


図3 指導者調査 実習指導者と短大の連携

や、「受け持ち利用者の心理面まで知ることは短期間では難しい」ので、どのようにして心理面を知ることかという段階もあった方がいいのではないかという意見もあった。

ルーブリックに足りない項目があるかについては、3名が少しあると答え、残りの12名はないと回答した。一方、いらぬ項目があるかについては、記述なしの3名以外の12名がないと回答した。今回設定した項目については、ほぼ適切であると考えられる。

実習指導者と短大側で学生の学びに対する連携ができると思うかについては、15人中10名が「できる」「ややできる」と回答しているのに対し、「ややできない」「できない」は15人中3名であった（無回答2名）（図3）。肯定的回答をした方からは、「学生の優れている所、足りない所が明確になり、より理解ができる」「学生を評価するときの着眼点を日頃より意識できる」「学校の評価や前回実習先の評価があれば、それを見たとえで実習に受け入れる側が把握する事で、アプローチの方法が変わってくる」などの意見があった。できないと回答した方は、「連携を図るのであれば、中間カンファレンスで、一旦評価を行い、話し合い等をすれば良いかもしれない」という意見があった。実習指導者と短大との連携は概ね可能であるとの意見が多いが、より連携を深めるため、中間段階での評価をその後の指導に活用することなどを検討する必要がある。

4. 学生へのアンケート

今回実習に参加した学生に対しても、ルーブリック評価票による評価方法についてのアンケートを実施し、20名（日本人10名、外国人留学生10名）から回答を得た。回答者の実習先は特別養護老人ホームが16名、老人保健施設と障害者施設が各2名である。

実習に対する満足度は、12名が満足、6名がやや満足と答えたのに対し、やや不満と答えたのが2名（2名とも日本人）であった。満足の理由としては、「自分の課題を見つけることができた」「様々な体験ができた」「コミュニケーションがよく取れた」などが挙げられる。やや不満と答えた学生の1名は、実習先施設の職員と少し揉めたためと回答している。

ルーブリック評価票の評価のしやすさについては、20名中15名が「大変しやすかった」「ややしやすかった」と回答したのに対し、「ややしにくかった」は5名（日本人3名、留学生2名）であった。肯定的な意見としては、「詳しく書いてあるから分かりやすい」「できたこととできなかったことがはっきりわかった」、否定的な意見としては、「項目が多すぎてやりにくかった」「文字が多くみづらかった」というものがあった。

今後ルーブリック評価にした方が良いと思うかという設問に対しては、20名中19名がルーブリック評価の方がよいと答えている。評価のしやすさで挙げられた理由のほかに、「正確に評価できる」という意見があった。一方で、「納得できないところはもう少しコメントがほしい」という意見もあった。

短大が求める目標レベルを理解できたかについては、20名中18名が「できた」「ややできた」と回答し、「ややできない」は2名（日本人）であった（図4）。「ここまでできると評価5になると知ることができた」「求められる介護技術がわかる」という意見があった。

実習先からの評価と自己評価を比べてどうだったかについては、「施設評価の方がかなり良い」が8名、

「施設評価の方が良い」が5名、「ほぼ同じ」が3名であり、施設評価の方が悪いと答えた学生はいなかった（無回答4名）（図5）。全般的に見て、自己評価を厳しくしている傾向にある。なお、「かなり良い」8名のうち6名が留学生であった。日本人か留学生かによって、評価に差が出ている可能性がある。

実習評価が納得のいくものだったかについては、「納得できる」が12名（日本人、留学生6名ずつ）、「やや納得できる」が3名（日本人2名、留学生1名）、納得できないと回答した学生はいなかった（無回答5名）（図6）。日本人、留学生ともルーブリック評価に納得しているという結果であった。

ルーブリック評価票の5領域について、記述のわかりにくい表現など改善すべき点がないか自由記述で回答を求めた。コミュニケーションについて、留学生から、日本人と留学生で目標を変えたほうが実習をやりやすいとの回答があった。確かに、日本語運用能力が低い留学生と日本人のコミュニケーションの目標を同程度に設定するのは無理があるのかもしれない。そのほか、介護活動について、技術を食事、入浴、排泄に分けるなど、具体的に記述してほしいという意見や、施設理解の記述が長く、言葉が分かりにくいという意見もあった。

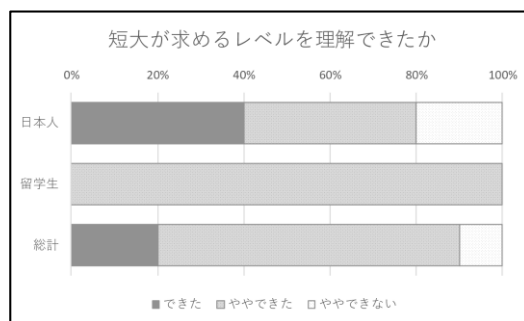


図4 学生調査 実習レベルの理解

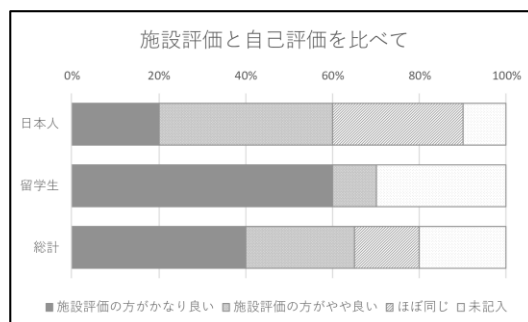


図5 学生調査 施設評価と自己評価の差

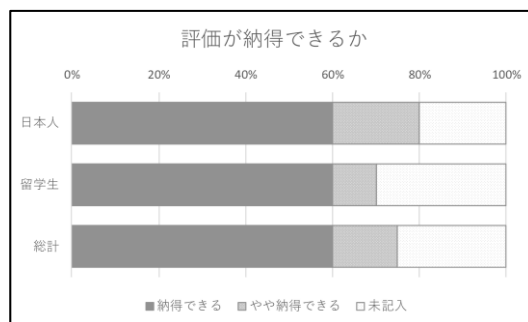


図6 学生調査 評価の納得感

5. インタビュー調査

実習指導者より、ルーブリック評価票は、従来の評価票より評価点が高くなるとの意見があったことから、A 特別養護老人ホームの4つのエリアでの指導者4人にインタビューを実施し、高評価になる要因を探った。インタビューの主な意見は、表1のとおりである。

以前の実習評価票では、具体的な評価の基準や詳細な指標が示されておらず、実習指導者は、学生の評価を学生の実習中の動きや態度、記録物などから判断し評価をしていた。その評価判断は、各施設の指導者の経験や、介護福祉士の資質としてはこれくらいの能力が必要ではないかなど、自分なりの基準やイメージがあり、それを求めるような評価になっていたのではないかと考えられる。それは、評価をもらった学生から、「指導者によって評価が違う」と意見が出ていたことから推察される。インタビューで、実習指導者は、「学生は一生懸命やっているけどできない場合もあるが、施設はそこまで求めている、実習生としてそれなりにできていけばよい点になる。」と話されているが、実際に評価する場合、学生が真面目で一生懸命であり、挨拶や笑顔が見られ利用者ともコミュニケーションが取れ、介護技術

もでき安心して任せられる学生であると判断すると任せってしまうことも多く、そのような場合多くの項目に良い評価をつける傾向にあるようである。一方、真面目だけれど介護技術は危なっかしい、常に監視していないと任せられないと判断すると、総合的に評価は悪くなる傾向にあるのではないかと考えられる。つまり、任せられると判断した学生は、他のこともできるだろうと予測し良い評価となり、任せられないと判断した学生においては、指導者の観察状況が強化される可能性が高くなり、評価も低くなる傾向にある。

実習指導者は、長期にわたって持ち続けた評価の基準に、ルーブリック評価票の視点や基準が入ったことで、自分の思いとルーブリックの基準にズレを感じたと思われる。ルーブリック評価票は、それぞれの指標の基準が明文化され、学生の動きを評価するよう求めているため、実習指導者の実習学生に対するイメージと実際の行動と異なってくるところがあるため、思ったよりも評価点が高くなったということであろう。

留学生においては、日本語のハンディがあるが、「記録」や「コミュニケーション」に反映される程度で日本語を評価する項目がないことから、実践において、機転が利き、介護技術を学ぶ姿勢と利用者への対応が良いなどの社会性が高い留学生だと、かなり高評価となったと考えられる。

表1 指導者へのインタビューにおける主な発言

-
- ・評価の表現に「～がみられる」とあるとすごく頑張っているようにとってしまうことから、記録に残ってなくても行動に出ていれば良い評価に繋がる。
 - ・記録に書かれていないが、実際にやってみるとできていると評価はよくなる。
 - ・普段の動きで出来ていると、「できるよね」と予測して良い点を付けてしまう。
 - ・実習目標に関しては、毎日立ててきていれば内容に関係なく最高点になる。
 - ・ルーブリック評価票で、「～できないときがある」の表現は、職員から見て、「そんなことはないでできるよね」となると良い点になる。また、「～ができる」であれば、自分がみている範囲でできていれば良い点を付けるので高くなる。
 - ・コミュニケーションの評価は、傾聴していると最高点を付けやすい。
 - ・従来の評価票での評価の際は、学生が、誠実で、真面目で、挨拶ができて、利用者に丁寧なものがいえると、これだけで評価が高くなるので、その他のこともできるだろうと予測して想像の範疇でつけていることはある。
 - ・一生懸命やっているけどできない場合もあるが、施設はそこまで求めている場合もある。実習生としてそれなりにできていたらいいかと良い点を付けてしまう。
 - ・ルーブリック評価票になくても、やっている感じも入れると高くなるのではないかと。

6. ルーブリック評価結果分析

2018年9月から10月にかけて、介護実習Ⅲの実習評価において開発したルーブリックを用いて実習評価を行った。21名の実習者（日本人学生10名、留学生11名）が、9つの実習園に分かれて実習したが、ルーブリックを使った学生による自己評価は回収できた19件（日本人学生9名、留学生10名）、施設からの実習評価は回収できた20件（日本人学生に対するもの9名、留学生11名）を集計した。

6. 1 学生の自己評価の傾向

留学生と日本人の自己評価結果を比べると、総平均で、留学生 4.45、日本人 3.77 で、留学生の方が自己評価が高い結果となった。特に差が開いた項目は、「自己目標」の「実習自己目標が達成できた」で、日本人学生平均 3.11 に対し留学生 4.90 で 1.79 の開きがあった。次に「コミュニケーション」の「受け持ち利用者とのコミュニケーションは円滑である」が日本人 3.00 に対し留学生が 4.60 で 1.60 の開き、3 番目は「介護活動」の中の「報告」の「報告は適切な時間にメモを活用し 5W1H (いつ・どこで・誰が・何を・どのように) を明確にした内容である」が日本人 2.89 に対し留学生 4.40 と 1.51 の開きがあった。日本人学生が明らかに高い項目は、唯一「実習態度」の中の「守秘義務」の「利用者のプライバシー保護のため、実習記録やレポートの作成・管理を慎重に行う」であり、日本人学生が 4.78、留学生が 4.30 と差もわずか 0.48 であった。

このように、全般的に自己評価が高い留学生であるが、留学生で特に高い傾向にあるのは、「実習態度」の「礼儀」の「健康管理」や、「自己目標」の「自分の立案した目標に向かって実践できる」などである。一方低い傾向にあるのが、「施設の理解」「記録」「福祉用具の適切な使用」「介護実習を通して、利用者の望む生活が理解できる」であった。

日本人学生は、「実習態度」の「協調性」「守秘義務」「礼儀」「健康管理」の自己評価が高い。一方全体傾向として低いのは、「コミュニケーション」や「介護活動」の「受け持ち利用者理解」「介護活動」の「介護実践の評価ができる」「介護活動」の「記録」などであった。

日本人学生と留学生の評価は、0.43 という相関係数が得られ、やや弱いながら正の相関があった。ともに自己評価が高いのが、「礼儀」「健康管理」であり、ともに低いのが「積極性」「施設の理解」「記録」と「生活支援技術」の「介護実習を通して、利用者の望む生活が理解できる」であった。

6. 2 実習先評価の傾向

施設評価においても、留学生平均が 4.05 に対し、日本人学生の評価の平均が 3.64 で、留学生の方が 0.41 高い評価を得ていた。日本人学生で評価が低いのは、「積極性」と「コミュニケーション」の「職員との意思疎通が図れる」で、中でも「いろいろな職員と話す機会を自ら作ることができる」が 2.75 と特に低い。留学生で低いのは、「施設の理解」と「記録」が低く、特に「施設の理解」の「施設が地域で果たす役割や機能を理解している」は、3.20 とより低かった。共通して評価が高いのは、「協調性」「守秘義務」「礼儀」「健康管理」で学生の自己評価と同じ結果であった。

実習先評価の学生ごとの平均値は、最大の施設で 4.82 (留学生)、最低の施設で 3.32 (留学生、日本人学生)となった。日本人学生の最高が 4.52 で日本人学生の間で 1.20 の差があった。留学生間には 1.50 の差があった。

施設ごとに評価の平均を求めた (表 2)。評価平均が一番高い施設は 4.37、低いところは 3.32 で、大きな開きがあった。留学生だけの施設は評価が高い傾向にあった。留学生と日本人が共存しているとこ

ろは、評価の差は大きくなく、日本人だけの施設は評価が低い傾向にあった。しかし、実習担当教員によれば、本国において教員や看護師などの社会経験があり社会性のある留学生が多く実習した施設では施設評価の平均は高くなっており、他の科目等でも評価が低い日本人学生は実習においても評価が低い場合があるということから、このデータだけでは、施設間に評価の差があるとは言えない。

表2 施設ごとの評価平均

	評価平均			実習人数		
	全体	留学生	日本人	全体	留学生	日本人
施設A	4.37	4.37		4	4	
施設B	4.26	4.26		1	1	
施設C	4.25	4.15	4.52	4	3	1
施設D	4.05		4.05	1		1
施設E	3.82		3.82	2		2
施設F	3.58		3.58	2		2
施設G	3.52	3.58	3.45	2	1	1
施設H	3.49	3.46	3.54	3	2	1
施設I	3.32		3.32	1		1
集計	3.85	3.97	3.75	20	11	9

6. 3 学生自己評価と実習先評価の差

自己評価と実習先評価の両方のデータがそろっている18件（留学生10件、日本人学生8件）で学生の自己評価と実習先評価の比較をした。学生の自己評価と実習先評価の差の平均は、日本人学生は、0.09と評価の差はほとんどない。留学生は、0.41と留学生の自己評価が実習先評価よりもやや高い傾向にあった。学生の評価よりも明らかに高い評価であった施設は1つだけで、差は0.45であったが、学生の自己評価が特に低いケースであった。学生の自己評価の方が特に高かった施設は、いずれも留学生が実習生で、1.09、0.89などの差があった。

評価項目で見ると、施設評価の方が明らかに高いのは、「健康管理」のみで、留学生で0.25、日本人学生で0.13、全体で0.19とわずかである。一方、学生が高い傾向にあるのは、「自己目標」の「目標に向かって実践している」、「コミュニケーション」「いろいろな職員と話す機会を自ら作ることができる」で、0.78の差があった。大項目で見ると、「コミュニケーション」の「職員と意思疎通が図れる」、「施設理解」、「介護活動」の「受け持ち利用者の介護過程の展開」などで大きな差があった。

学生の自己評価と施設の評価の各項目の平均の相関を比べると相関係数は0.785で、学生の自己評価と施設評価には強い正の相関があった。日本人学生の自己評価と日本人学生に対する施設評価とは、0.770でこちらも強い相関があった。留学生の自己評価と施設の留学生との間は、0.528で高くはないが相関があった。

6. 4 分析の整理

以上の評価データの分析結果から言えることを表3にまとめた。

評価データの分析から、学生の評価の付け方の傾向、学生にとって苦手な項目やできる項目の傾向や実習先が学生に求める項目などを見つけることができた。例えば、今回の留学生は社会性がある評価が高い面があるが、記録やコミュニケーションに関して施設担当者の評価が低く、日本語能力をさらに高めていく必要があることがあらためてわかった。また日本人学生も留学生同様に記録をとることや職

員とのコミュニケーションをとることに弱点があることが浮き彫りになった。

このように、留学生、日本人学生が自分自身得意、不得意と感じる傾向がルーブリックの集計結果から見え、同様に施設の実習指導者による評価についても傾向が見え、学生の弱い点が明確になることから、本学の介護福祉コースの教育や実習指導の改善に活かすことができると考えられる。

表3 評価データからの分析結果

-
- ・留学生は、自己評価が高くなる傾向があった。
 - ・本学介護福祉コースの日本人学生は、自己評価が低く自己肯定感が低い傾向にある。
 - ・施設評価は留学生が高い傾向にある。本学の留学生は、社会人としての経験がある学生が多く、実習で必要な社会性が発揮されているものと考えられる。
 - ・留学生、日本人ともに「記録」について自己評価も実習先評価も低く、特に留学生の評価は低い。
 - ・コミュニケーションは、留学生の自己評価も低い日本人の学生の方がやや自己評価が低い傾向にあったが、施設の評価は留学生に対して厳しい。
 - ・利用者とのコミュニケーションに比べ職員とのコミュニケーションについて、実習先評価との開きがあり、実習先はより職員とのコミュニケーションをとることを求めていることがわかった。
 - ・学生の傾向として、協調性、守秘義務、礼儀、健康管理は、評価が高かった。
 - ・実習先評価と学生の自己評価との間には強い相関があり、とくに日本人学生の評価の間は相関が強かった。ただし、留学生の自己評価とも相関はあるものの日本人学生ほどではない。

7. まとめ

本研究会が作成したルーブリック評価票を、今回実際の実習に適用することができた。また、その結果の分析をし、実習施設指導者と学生の評価の傾向や学生の強み弱みを探ることができた。さらに、学生や実習施設指導者へのアンケートやインタビューにより、開発したルーブリックの効果や改善点を検証することができた。

実習施設指導は、アンケート調査の結果、ルーブリック評価について概ね評価しやすいとの回答であったが、日本語能力の十分でない留学生の評価については、ほとんどが難しさを感じている。評価票の中の記述の改善すべき点については、施設理解に関する意見が多かったほか、実習態度や介護活動の記述について判断の難しいものがあるとの意見があった。実習先職員と短大との連携については可能という回答が多かったが、前回の評価を確認したうえで実習に受け入れたり、中間段階での評価を行いその後の実習に活用したりすることによって更なる連携が可能であるという意見もあった。

学生に対するアンケートでも、従来の評価よりもルーブリックのほうが、自己評価がしやすくよいという回答が多い。多くの学生が、実習先からの評価と自己評価を比べると施設評価のほうが良い評価であったと答えているのに対し、自己評価のほうが良いと答えた学生はいなかった。また、実習評価は納得のいくものであったという回答が多く、納得できないという回答はなかった。記述の改善すべき点について、留学生からは、日本人と留学生で目標を変えたほうがよいという意見があった。

学生のアンケート結果からは、学生自身の不平等感は見受けられず、むしろ自己評価よりも厳しいはず

の実習先評価を、思ったよりも良かったと受け入れむしろ良いと考えている。データの分析から実際には、学生の評価の方が高く、実習施設側の評価の方が厳しかった。それにも拘わらず学生がその評価結果を良いと感じた理由は、どのような行動ができないと評価されないのかということがルーブリックによってしっかり認識できたからではないだろうか。どうしてこういう成績になったのかが、従来は説明できておらず学生からの不満が聞こえていた。しかし、今回は不満がなくむしろ好意的に受け入れている。それは、ルーブリックの各指標に記述されている基準が、学生に対しどうしてそういう成績になるのかという理由を明確に伝えており、ルーブリックの効果が発揮されたと考えられる。

インタビュー調査からは、実習施設指導者の評価基準にあるものとして、実践現場において学生が真面目に一生懸命取り組んでいるか、介護技術は安心して試みられるか、挨拶や笑顔が見られ利用者ともコミュニケーションが問題なく取れるかなどであることが語られていた。従来の評価票は、評価指標が「介護実習の手引き」に示されてはいるものの、評価項目の一文でしか挙げられていない。評価時には参照され難く、実習指導者の経験からくる暗黙知が評価の基準になる傾向にあった。一方、ルーブリック評価票は明文化されていることから、実習指導者の暗黙知だけによる評価を防ぐことができる。今回、実習施設指導者は、従来であれば厳しくつけていた項目がルーブリックの記述語に引きずられ、少しでもできていれば良い評価をつける傾向にあった。実際の実習評価に開発したルーブリックを適用したことで、実習施設指導者に対して評価の視点を明示することができたと考えられる。今回のルーブリックの導入は、実習指導者が、自身の評価のやり方について自己評価する機会となったといえる。評価観が指導者個人の経験によるものでばらばらであったものが、ルーブリックにより統一した基準が示され、実習評価に求められる視点と基準が指導者に明確に伝わり、評価においてばらつきが小さくなった。ルーブリック評価データの分析からも、実習施設指導者は学生の行動に基づいた評価がなされた様子が窺えるとともに、学生からの不満も聞こえてこない。

ルーブリック評価結果を分析することで、学生が弱いと思っているところ、施設側が学生に厳しく評価しているところ、あるいは学生自身が良いと感じているところ、実習評価者が出来ていると感じているところが見えた。これにより、介護教育における教育や実習指導の準備において、指導の改善につなげることができると思われる。実際に、ルーブリックの評価結果を次の実習の受け入れの際に提示し、どのようなところができていないのかを把握して受け入れの指導に活かしてもらうことや、実習前半に施設側からの評価及び自己評価をさせて、その結果をもとに中間カンファレンスを行い、後半の指導に活かしていくということも考えられる。この結果を受け、実習指導の改善がまさに求められている。

課題は、ルーブリックのさらなる改善が必要であるということである。理由の一つ目は、留学生に対して、同じルーブリックでよいか、特に日本語能力の差による記録やコミュニケーションについて項目を増やすなど検討できるのではないかとということである。二つ目の理由は、インタビューからルーブリック評価によりイメージや先入観による評価が是正されたと考えられるが、ルーブリックを用いても、まだまだ学生の良い印象、悪い印象により評価が引きずられている可能性が見受けられる点である。また、ルーブリックの記述語の表現が実習施設指導者を戸惑わせ、現場にあっていないところがあるという声もあり、施設の実習担当者と連携を深めてルーブリックの改善を進めていく必要がある。

引用・参考文献

- ・安藤輝次 (2008) 「一般的ルーブリックの必要性」『教育実践総合センター研究紀要』17 巻、pp. 1-10.
- ・柘崎京子、松永 美輝恵、宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子 (2018) 「介護実習の実習目標達成を支援するための取り組みと課題：「実習課題ルーブリック」の作成と活用結果から」『介護福祉学』25 巻1号、pp. 1-10.
- ・福田洋子、野呂健一、寶來敬章、鷺尾敦 (2018) 「介護実習におけるルーブリック評価導入に向けての課題 - 実習施設へのアンケート調査から - 」『高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報』第4号、pp. 35-46.
- ・松下佳代 (2007) 『パフォーマンス評価 - 子どもの思考と表現を評価する - 』日本標準
- ・松下佳代 (2012) 「パフォーマンス評価による学習の質の評価 - 学習評価の構図の分析にもとづいて - 」『京都大学高等教育研究』18 巻、pp. 75-114.
- ・三木知子 (2018) 「ルーブリックによる教育・保育実習自己評価スタンダードの提案」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』12 巻1号、pp. 1-10.
- ・宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、柘崎京子 (2017) 「初学習段階における「介護実習記録」を課題とするルーブリック評価の施策と活用」『帝京科学大学紀要』Vol. 13、pp. 77-86.
- ・文部科学省 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて - 生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (中央教育審議会答申)」
- ・長峰伸治、成松美枝、高橋佐和子 (2018) 「本学養護教諭課程履修学生のルーブリックによる自己評価 - ルーブリックの作成と実施について - 」『聖隷クリストファー大学看護学部紀要』NO. 26、pp. 7-17.
- ・岡山加奈、荻あや子、高林範子、山口三重子、萩野哲也 (2014) 「既存の基礎看護学実習評価表の課題とルーブリックを用いた評価表の提案」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』第21 巻1号、pp. 9-16.
- ・Stevens, Dannelle, D., Levi, Antonia J., (2013) Introduction to Rubric: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning. Stylus Publishing (=佐藤浩章監訳、井上敏憲、保野秀典訳 (2016) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部.)
- ・山口陽弘 (2013) 「教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案 - パフォーマンス評価とポートフォリオに着目して - 」『群馬大学教育学部紀要』人文社会学編 62 巻、pp. 157-168.
- ・山下喬之、四元裕子、松野下信三、長津秀文 (2018) 「用紙回向と実習指導者が協同で行うルーブリック検証の試み - 内容分析を用いて使用者の感想の分析から課題と改善策を明らかにする - 」『理学療法科学』33 (4)、pp. 675-682